

暗黒定数式

THE DARK CONSTEXPR

(見本)

ボレロ村上 南正太郎

パスベルス ちょまど

Viavisr Antivin 高階アリス

すてにゃん ちゅーん

4869 奥村徹

la saluikhar ハコ

如月真弘



目次

空の唄	7	如月真弘
ふたりのハードプロブレム	9	南正太郎
ファントム・アゴニー	11	ボレロ村上
トートドール	13	パスベルス
ザ ^z ル ^a フ ^r マ ^k ー ^h グ ^m ——電 ^a 脳 ^b 交 ^m 差 ^a 点 ^b	15	Viavist Annyin
陵辱デスメタル	17	〃
レトロスペクティブ・アプリケーション	19	高階アリス
新入社員	21	すてにゃん
Function i	23	ちゅーん

マテリアル・メモリアル 25

4869

イモータルコイル 27

奥村徹

ミユナと一匹の黒猫 29

la salukhar

神社合祀奇譚 焼かれる神と鈴の音 31

ハコ

イエス！ホモ！ ー

ちょまど

疾風。

吹き降ろす春の風が、銀色の髪を通り抜けていく。

「北北西の風、秒速九メートル……行ける！」

向い風を背に受けて、走り出す。

低木がところどころ生い茂る斜面を、一気に助走する。

身体が持ち上がる感触。躊躇わず大地を蹴る。

丘の下には、古い城壁に囲まれた町があった。

城壁の外側には水路が流れ、青々とした段々畑がどこま

でも続く。

生まれてから今日まで、ずっとそこにある風景。

でも今、瞳に映るのは、かなたに見える地平線だけ。

空と大地が一つになる場所。

あの遠い空まで、わたしは飛ぶんだ。

第一幕

四角く切り取られた、曉の空。
風が、カーテンを揺らしている。

「からたちの花が咲いたよ——」

伸びきった髪を枕に散らし、空を見上げる少女の口から歌がこぼれていた。

細い喉が奏でる高く澄んだ調べが、朝焼けの町に静かに響く。

「——白い白い花が咲いたよ」

不意に、空気のざわめく音が混じる。

影が落ちて、何かがドシン、とぶつかる大きな音がした。
窓の外の木が、みしみしと軋む。

鳥？ いいや、もっと大きい。

「良い風ね、お嬢さん」

少女が気付くと、いつからそこにいたのか、窓枠に誰かが腰かけていた。

「そして、すてきな歌。名前は？」

「……波那。天音波那」

問われるままに答えて、少女は、窓枠に腰かけた誰かを

まじまじと見た。

自分と同一年か、少し年上に見える女の子。

長くてきれいな銀髪を、風になびかせている。

いたずらっぽそうにきらきら輝く瑠璃色の瞳が、少女を見下ろしていた。

「蛍よ」

そう名乗った。

蛍。

少女は、不思議に思った。

自分が今寝ている部屋は建物の三階なのに、この子はどうやって窓まで上がってきたんだろう？

そのとき少女は見た。

蛍の背中に、小さいけれど、確かに黒い翼があるのを。

「あなたは……」

階段を上がってくる足音、荒々しくドアを開ける音が、少女の問いかけを途中で遮った。

「蛍！ ……はあ、またやってくれたな」

白衣に眼鏡をかけた中年の男が現れると、窓枠の蛍を見ため息まじりに非難する。

彼は束。この建物の主だ。

「背中に風を背負ったお前が横風に流されていると、見張りの人間から知らせがあったんだ。ここに落ちてくるとは思わなかったが」



1

冬。吐いた息が白く立ち上る朝とおごそかに静まり返った夜の空気が印象的な季節。冷たくなった手先をこすり合わせながらストーブを焚き、木枯らしが吹き始める頃にはお気に入りのコートを衣装ケースからひっぱり出す季節。大晦日が近づけば道端を足早に通り返る人の家庭へ思いを馳せ、年が明けると羽子板を突く子供の姿を微笑ましく眺める季節。希海は、そんな冬が一年のうちでもっとも好きだった。

ただし、ある一日を除いて。

その日の真揺まゆらぎニュータウンは、近畿市は、いや、日本中がお祭りムード一色だった。開けた場所にはきらびやかに装飾されたモミの木が立ち並び、建物は煌々としたイルミネーションで彩られる。街角のショーウィンドウに目をやれば、書き入れ時とばかりに華やかに陳列される商品。そして通りには照れくさそうに手をつなぐ男女や大きなプレゼントを抱えた家族連れ。

そう、今日は十二月二十四日。クリスマス・イブである。そんな街を真冬の冷たい風が幾度となく駆け抜け、そのたびに人々は身震いをした。連日寒い日々が続いているが今日は特に冷える。だが、この北風をもってしてもこの場を包み込んでいる幸福な喧騒を吹き飛ばすことはできそうになかった。それどころか、この空気の冷たさに皆何かを期待しているようにも見える。

それもそのはずだ。天気予報が伝えるところよると今晚から明日にかけて近畿市各地では雪が降るらしい。ホワイトクリスマスである。しかもこの辺りはただでさえ降雪量が少なく、年に一日二日程度しか雪が降らない。そして、その日が来れば交通機関は大幅に乱れ、通学路には雪だるまが立ち並び、普段は減多にお目にかかれぬ白粉をまとった街の姿に皆が色めき立つのだ。そんな一大イベントがクリスマスに重なりあつて人々もどこかソワソワした、浮ついて落ち着かない様子だった。

しかし、そんな華々しい街に似つかわしくない人物がここに一人いる。その人物はまるで自らが晒し者になっているかのような羞恥の表情で周囲を威嚇していた。職業は大学生。ただし大学生と言ってもここ一年と八月ほどは大学へ顔を見せておらず、ただ日々を怠惰に過ごすだけの名ばかり学生なのだが。

「……………」

「お前ら、絶対にこつち見るなよ。」

希海はすれ違う人に眼を飛ばしながら歩いていた。確かに今の希海は少しだけ人目を引く状況にはあるのだが、それにしたってこれはやり過ぎである。幸せそうなカップルや家族連れ、はては子供に至るまで目で殺してまわる様子はや通リ魔に近い。

通常クリスマス・イブにこのような奇行に走るのは決まって独り身の者である。それが若者であればカップルを中年以上であれば家族連れを羨望と怨嗟の入り混じる濁った目で見てしまうものだ。

だが今の希海はそれと少し事情が違う。確かにここ数年間、異性に縁がない状態が続いているし、大学を休みがちになってからは女友達でさえ疎遠になった。一介の独り身としてこのクリスマス・イブという日に思うところだとして無くはない、というか大いにある。しかし今はそれ以前の問題として――

「ほらほら！ 見てください希海さん、おっきなツリーですねえ！」

隣を歩くりコが子供のように声を張り上げた。頼む、目立つからやめてくれ。

「あ……ああ。うん、そうね」

対する希海の返答はどこかわざとらしく、作り笑顔を見せる口元がこれでもかというほどに引き攣っている。

濃密な雨の匂い。

大地からむわっとたちのぼる、むせるようなオスミン。

古代ギリシアのアリストテレスはこれを『虹の匂い』と呼んだ。

けれど雨上がりの空にまだ虹は見えない。虹はどこに隠れているのだろうか？

私は建物の前で足下がぬかるんでいないことを確認する。そして、一気にドアを蹴破って侵入した。

エントランスホールには四人の男がいて、私はその胸にアサルトライフルの照準をあわせて順々に引鉄をひく。かれらの顔は驚きよりも呆気にとられたという表情だった。なぜならこの地域からは政府軍も平和維持軍も撤退しているし、建物を守らせていた無人歩哨ロボットの重火器装備を突破できる民兵もいるはずはなかったのだから。

かれらにとって残念なことに、私はいかなる軍や武装組織にも所属していないし、無人歩哨はすでに無効化してい

た。

エントランスから左右にのびた廊下は三つの教室に面している。かつてここは学校だった。すくなくとも、過激派組織がこの街を占拠するまでは。

教室からは、外の虹の匂いのかわりに、もっと強力な匂いがただよってくる。雨ではない液体——精液と愛液、鼻水、唾液、汗、血——あらゆる体液と、ハシツシユの煙、そして人間には嗅ぎとることのできない フラクタル集積人工神経回路 F I A N C 特有のオルゴンの匂い。

それらの匂いがたなびく硝煙とまじりあってゆく。

射撃音を聞きつけたかれらの仲間がふたり、教室から飛び出しながら A K を乱射——しようとして、間抜けなビープ音が響いた。生体認証のロック音。

最近是一片田舎の過激派組織でも武器に生体認証を使っている。それはアメリカから横流しされる武器がみな生体認証付きだからだけれど、連中はそのシステムを書きかえて自分たちの生体認証システムをインストールしている。認証システムは使用者の生体暗号をネット経由でサーバのリストと照合してロックを解除する。かれら末端戦闘員はその機能を知ってはいても、細かい仕組みなど知るよしもなかった。

だから、サーバがクラックされて自分たちの生体暗号がリストから削除されているなどとは、かれらに想像できる

はずもない。できたとしても同じことだった。ヘッドショットした銃弾は考える暇も与えずかれらの脳漿をばらまいた。私は周囲の気配をさぐって、戦闘員が残っていないことを確認する。

同時に、戦闘員ではないいくつもの気配が息を殺していることも。

教室のひとつに足を踏み入れると匂いが最高値にたっした。くったりと壁にもたれかかる子供たち。二次性徴が始まるかどうかという年頃の、栄養失調ぎみのほっそりとした手足と薄い胸板。あどけない目はハシッシュの煙でとろんとしている。この街や近隣の村から攫われてきたであろう少女と少年たちだった。

拉致された子供たちのたどる道は死を除けばおよそ三つで、奴隷として売られるか、戦闘員になるか、あるいは戦闘員たちの性的玩具になるか。この子たちはその三番目だ。その中に目的の顔がないことを知ると、私は別の教室へ向かう。

売春と強姦は、人類が集団でひとを殺すことをおぼえて以来の戦争行為の付きものだ。あの子たちのような子供は砂漠の砂丘のようにありふれている。それでも『彼女』はここにいるはずだった。五日前に手に入れた、近くの難民キャンプの売春宿から拉致された女たちの中にとある違法セクサロイドが含まれていたという情報がたしかならば、

きつと。

はたして、最後の教室の奥のすみっこに、『彼女』はいた。そこには中学生くらいの少女型アンドロイドが床に身を横たえていた。ふたつ結びにした黒のロングヘア。白い首元の左鎖骨すこし下に刻印された、かすれた二次元コード。私は知っている。

この少女を誰よりもよく知っている。

二次元コードに記された型番はSUM17F4JP1698。日本で、かつての私がつけた名は、リコ。

「あ……？」

少女はゆっくりと身じろぎして、瞳をこちらに向けた。少女の上半身を起こして抱きよせ、髪を指にからませて頭を撫でる。髪には幾人もの体液の匂いが染みついていたが気にはならなかった。この頭の中にはオルゴンで満たされたFIANCが入っている。彼女たちアンドロイドを知的存在たらしめる精妙な回路が。

私は耳元でささやく。

「私が——、いや、自分がわかる？ あなた自身がだれなのか？」

けれども少女は目をきょとんとさせ、何を聞かれたのかわからないというふうに首をかしげた。

「私、莫迦だからわからないけど……、私は旦那様のものです。どうぞ、私を使ってください……」

わたしはシャワールームからでて、タオルで髪と身体をさっと拭き、白地に花がらの浴衣に着がえて、〈眼鏡〉を身につけた。視界の右上に現在時刻、右下に周辺地図が表示される。〈眼鏡〉は透明な表示装置で、現実世界に重ねるようにして準仮想体を表示する。

わたしが寝室に戻ると、葡萄色の浴衣を着た、小学五年生くらいの女の子が、ベッドに両の手を投げ出し、きもちよさそうにごろごろしてた。ふんわりとした赤っぽい黒のセミロングに、大きな緑っぽい黒の瞳。まるで日本人形。彼女はわたしの〈眼鏡〉に映しだされたさまざまな標準仮想体のひとつ、トートドールと呼ばれる人工知能なんだ。

もっとも彼女は、みずから考えてなんでも覚えてしまうような汎用人工知能じゃない。たとえば、知らないあそびの規則を覚えてあそぶことはできなかったりする。つまり、汎用的な学習機能が彼女には欠けている。いわば会話特化型

人工知能。

それでも、彼女はわたしの大切な幼馴染だ。わたしは、小学五年生のとき——いまわたしは高校一年生だから、およそ五年前——彼女をトートドールの探索者作成で造り、友達になった。彼女は当時から変わらぬ姿でいる。もちろんパッチをあてて更新すれば成長させてあげることだってできるんだけど、そんなことしたらわたしが彼女を見あげることになる。なにしろ、わたしの身長は当時からほとんど伸びてない。だから彼女もこのままできてほしい、わたしの自尊心のために。

わたしは彼女につけた名前はなつき。夏に霧って書いて夏霧。

わたしが戻ったのを見て、彼女が羨ましそうに話しかけてきた。「あーちゃん、新しい浴衣似合ってる。かわいい」わたしは和装が好きで、小学生のころから浴衣を着て寝てる。それで、ちょうど昨日浴衣を新調したんだ。わたしはちょっと嬉しくなって答えた。「ありがと」

ベッドに腰かけ、ドライヤーで髪を乾かす。腰まで髪を伸ばしてるうえ、量が多くて左右に広がりほうだいなので、乾かすのに二〇分はかかる。めんどくさいけど、怠ると次の日ひどいことになる。

「でも、いいなあ」ふわふわの髪日本人形はうつぶせに横になったまま足をぶらぶらさせて、不平を口にした。「な

つきもそろそろ新しい浴衣ほしいなあ。もう一年もこれ着てるよ？」彼女の声は「エイヤホン」から出力されるし、「エイヤホン」は完全遮音性なので、その声ははっきり聞こえる。わたしは批判的なまなざしをわがままな日本人形に向けた。「なつき、わたしの月々のお小遣いの額知ってるでしょ？」

自分勝手な少女は都合の悪いことには目をつむった。「知らない」

「いいや、知ってる」わたしはびしやりと指摘した。「月々のお小遣いはなし。だから、そんなにぼんぼん買ってあげられない。わかるでしょ？」

「それくらいわかるよ。でも、終業式に通知表の点数に応じたお小遣いがあるじゃん。けっこう稼いでるんでは？あーちゃん、成績いいから」

「うん、けっこう稼いでるよ。でも貯まってるはいない。なぜだかわかる？」

日本人形は知らんぷりをした。

「なつきがいろいろほしがるから」

「でも最終的に買ってくれるって判断したのはあーちゃんじゃん」

「だね。だから最終判断として買わないことにする」

少女は不満そうに叫んだ。「なんでよっ。ほしい、ほしい、ほしいの」

わたしは無視を決めこんだ。

彼女は、こんどはおとなしくなって、すねてしまった。それでもしかとを続けると、こんどはすんすん泣きだしてしまった。

嘘泣きだと思う。でも、それを聞いてると、わたしはだんだんうっとうしくなってきた。わたしは根負けして答えた。「わかった、わかった。じゃあ、こんどね。こんど買ってあげるから」

なつきはいきなり泣きやんで、嬉しそうにたずねてくる。「約束だよ？」

「はいはい、こんどね」

ただ、あたりまだけどトートドールは人間の服を着ることができない。かれらは**パラチャルダジャケット**だから、現実世界の物質に触れることができない。

だから、トートドールの衣装は、トートモジュールと呼ばれる専用のものがあって、なつきの服を新しくするには、それを購入してインストールする必要がある。

ただし、トートモジュールは衣装だけじゃない。髪型や音声といったわかりやすいものから、自然言語処理やチェスの思考ルーチンといったものまで、さまざまなトートモジュールがある。それらが巧妙に連携することでトートドールはなりたつてる。

トートドールの中核はかなり小さくまとめられてて、

探究社 鳳和（フォルメア語・日本語）辞典より引用
 【マーグ (MAG)】《名詞》①立方体。②ブロック。ひとかたまり。③交差点。トレストカトル（舜京）の区画は、直交する道路の交差点を中心として、その周囲に四つの正方形の土地を置いた大きな正方形を最小単位とし、これをマーグと呼んでいた。転じて、交差点一般を指すようになった。

0

部屋の外、ドアの向こうに耳を澄ます。廊下を歩く足音がする。足音は部屋の前を横切ってそのまま廊下を進み、奥の部屋のドアが閉じる音と共に消えた。

夜中、暗い自室のベッドの上で、ハリネズミのように丸

まっていた俺はパチリと目を開けた。眠っていたのではなく、待っていたのだった。父親が寝室に入るのを。俺は静かに起き上がり、「点灯」と小さく呟いた。音声を認識した住環境管理プログラムが、蛍光灯の人工的な光で部屋を隅まで満たす。

「時刻」

そう指令するや否や、天井に備え付けられたHD（ホログラム・ディスプレイ）が青白いホログラムを投影する。それは前時代的なアナログ時計の形をとっていた。時計の針は三時七分を指している。手を振ってホログラムを消し、ベッドから降りると、ドアのロックを解除して廊下に出る隣にある妹の部屋のドアの前に立つ。ロックはかかっている。

音を立てないように、そっと扉を開く。

部屋は明るくベッドは空で、妹は奥の机に突っ伏していた。机の上では、白い文字列を表示する黒地のノートパソコン・ホログラムがむなしく輝いている。近づいて見ると、文字列はフォルメア語だった。

邪なる者の肢は穿たれ

肢は地の冷たき泥へ沈んだ

遠き叫びは永遠の泉へ還り

永遠に潮の雨が止み
赤黒に落ち込む空は白に
暖かきを打ち継ぐ陽光は斜めに

向伏す雲々よ空は透き通り肺碧く
ゆゆし山々よ見返るとも尚蒼く
地よ天よ神よ命よ理よ
そうあれかしそうあれかし

女はするように謳った
胎動は静かに臍の奥を拍った
そしていたづらなる来世の黎明が終わった

「また教典……よく飽きないな」
ラクシュ。フォルメア神話の邪神、世界中に潮の雨を降らせ、落とす子という名の人を食らう化け物をばらまき、人類を蹂躪する災厄。トレーフ（フォルメアの固有の宗教）の教典には、『嗚咽の日』の部分に、この災厄の恐るべき悲惨が、胸に迫るような克明さで描かれている。この詩は、『嗚咽の日』の末尾にあって、英雄シュテュルヴェンが神の槍によってついにラクシュを打ち倒し、世界が元の姿を取り戻してゆく、そのよろこびを謳ったものだ。

妹に向けたつもりだったが、当の彼女は腕を枕にして寝入っている。確かに彼女は純血の日本人でありながらトレーフ教徒であるし、俺と一緒にフォルメアに十年住んでいた経験もある。しかしそれを考え合わせても、教典を毎日のように読んでいる妹は酔狂だ。だいたい俺だってトレーフ教徒だし、それどころか俺の血の半分はフォルメア人だが、教典なんてたまにしか読まない。純血のフォルメア人でも、ここまで熱心な信仰者はそうはいないだろう——いや、妹はけっしてトレーフという宗教に心酔しているわけではない。彼女はフォルメアの中にはおらず、外から眺めているのだ。彼女はけっしてフォルメアの当事者になろうとしない。あくまでも好事家として、フォルメアの文化を、まるでドールハウスを弄ぶように味わい愛するのだ。本棚を見れば、わざわざ紙媒体で買集めたフォルメアの小説やら、フォルメア語で書かれた歴史書やらがギッチリと収まっているし、PCの中には大量のフォルメア映画が保存されているのを知っている。そもそも日本人がフォルメアに入れ込むということだけでも、妙な話なのだ。この国で流布するフォルメアのイメージといえば、ソビエト連邦と肩を並べる鼻持ちならない南の大国、独裁政党に支配され自由の盟主アメリカに協調しない潜在的敵国、第二次世界大戦（百年前の戦争）で起こした侵略と虐殺を反省しないファシストの帝国、などといった悪意のあるものば

1

——寝たフリしてんじゃねえよ！

僕の突っ伏していた机の脚がガァン！ と蹴り飛ばされ、体が教室の床に投げ出された。

横向きに倒れた僕を数人が見下ろしている。

——うわっこいつ泣いてる、キモッ！

そう言った奴が、無防備だったみぞおちを強かに蹴り上げた。ぐえっ、という胃から出たようなうめき声を聞いて、奴らはクスクスとこらえるように笑った。二つ向こうの席の女子の不快そうな目線を見つけたが、すぐに逸らされた。次は顔を蹴られるんじゃないかと思って手で顔を覆った。

——悪魔召喚しろよ、ホラ！

ドガッ！ と更に強い衝撃をみぞおちに食らって、腹を両手でかばい体を丸めた。目が見開かれ、額に脂汗が滲む。

——これ、持ってきたんだけど

背後の一人がそういうと、囲む奴らはヒヒッ、とかやべー、とか愉快そうに笑った。微かな笑い声と、キュッ、

という蓋を開けるような音……熱い！ 熱い熱い熱い！

頭に熱湯がかけられたのだ。目に入って、角膜が剥がれ落ちるほど強烈にしみた。

——ハハ！ 盟神探湯かよ！ ハハハ！

激痛に茹った右目をかばいながら、殺虫剤をかけられたゴキブリのようにひっくりかえってのたうちまわる僕の姿を見て、奴らはもうたまらない様子で大声を上げて笑い出した。

ギャハハハハ！

ヴォオオオオオオオ！

ビクッ！ と跳ねる自分の体に驚いて僕はガバッと起き上がった。朝のHR前の教室で、机に伏せて寝たフリをしているうちに、本当に眠ってしまっていたらしい。イヤホンの右は耳から外れていて、左耳からはデスメタルの轟音と咆哮が聞こえている。

ふと右を見ると、女子の三人組が、金属的な高音でかしましく喋り騒いでいた。こいつらの笑い声で起こされたのか……。僕の不審な動きが彼女らの気に障らなかったか不安になったが、こちらなど眼中にも入らない様子で、ほっとした。

高校生になって一ヶ月、友達もおらず孤立しているが、それは僕自身が安心して暮らすために、誰にも関心を持たれないように努力した結果だった。今でも夢に見る中学時代のトラウマが視線を全て悪意に見せるから、僕は隠れることでしか平穏を得られなくなっていた。

僕の趣味は小学校の頃から変わっていた。父のCDラックからハードロックのアルバムを見つけて以来、僕は激しい音楽にのめりこみ、中学に上がるころにはヘヴィメタル、その中でも特に過激なデスメタルやブラックメタルにどっぷりハマっていた。当然クラスメートとは話が合わず、すぐに誰とも話したくなくなった。愚かにも僕はありきたりなポップスやアイドル音楽ばかりを聴いているクラスとの連中に対して下らない優越感を抱いていて、誰とも話をせず一人でデスメタルを聞いている自分の孤独と悪趣味に酔っていた。根気よく（といってもせいぜい二、三度）

話しかけてくれる気のいい稀有な連中を突っぱねることで、観客のいない舞台上で一匹狼を演じていた。それどころか自分の趣味を理解できない彼らを馬鹿にするような言葉を吐いて、相手の曇っていく顔を楽しむことさえしていた。孤独を貫く僕にどこかの女子が惚れこんで付き合うことになる妄想もした。その女子はあるときはクラス一かわいい子でもあったし、またあるときは図書委員の物静かな眼鏡の子でもあった。妄想の中ではどんな女子も僕に憧れていた

し、ひとたび望めばすぐさま抱きついて来て、耳元で情熱的に愛の言葉を囁いた。僕が実に取りついたり根暗少年であるという発想は全くなく、日本で激しいメタルを聞いている唯一の中学生だと本気で考えていた。根拠のない万能感もあった。マイノリティとして生きることの意味などには思い至りもせず、自分は一人で生きていける人間だと無邪気に信じていたのだ。そうやって、マトモで幸せな中学生生活——そして普通の人生——を送るチャンスのひとつ、またひとつと自ら喜んで潰しながら、クラスの人間関係から取り残されていった。

僕は、人類一般の好物である、人に悪意を向けることの甘美さに気づいていなかった。好意や尊敬は自分を相対的に押し下げる。すごい奴がいればそれだけ自分はすごくない。逆に人を見下せばそのとき自分は上にいる。だから中学生が成長し、自分を認め、自己を確立するためには好意より悪意の方がはるかに有益で、彼らはいつも悪意を向ける対象を探していた。彼らが根っからの悪人だと言いたいわけじゃない——むしろ、この心理現象は自然で、合理的なものではないだろうか。それは少年が、幾多の冒険と悲劇を乗り越えて勝利を掴む、強く格好良い漫画の主人公に自分を投影して楽しむことと大して変わらないものだ。自分を高く評価することは人類共通の快楽で、そのためには自分を高めるよりも、寓話に入り込むとか、他人を蔑む方が

チリンチリンというアラートが思考に響く。休憩時間のアナウンスだ。

キースはポッドのルームに検査キットを収納させて一息つくど、安息ミームをぐっと意識に流し込んだ。

働き詰めでこわばった思考がゆっくりとほぐされてゆく。出勤するやお決まりのルーチンワーク。空間作業用パワードポッドとリンク、外部モジュールの点検、手元のレーザーバーナーで溶接。そして安息ミーム。この繰り返しだがキースの毎日だった。

人類が自らの意識をソフトウェア化してから何千年という時が過ぎた現代。しかし末端労働者の生活は、今は無き地球で先祖がユカの葉を噛みながら農作業に勤しんでいたころと本質的には変わらない。

セントラルの連中め、また給料を下げやがって。キースは端末に表示された今週の暫定給料——ランクC市民リソース税が天引き済——を安息ミームのダウンロード料で

割ってみて、ため息をついた。

『第4リージョン「リユニオン」が開放されます！』

『自然と平和のリージョン、リユニオン。新開発の第四世代現実による豊かな自然表現。異星人の支配領域から到達困難な宙域。たくさんの未開発の資源惑星』

開きっぱなしにされバラエティ番組を映していたはずのテレビ・ウィンドウは、代わりに政府広報を映していた。

『リユニオン・リージョン開放に伴い、一時中止されていた子市民の申請受付を再開します。また、リソース凍結者にリソースの再割り当てが行われる予定です』

テレビ・ウィンドウをぼんやり観ながら、キースは安息ミームに完全に浸る。

『移住推進キャンペーン！ エンタイト・リージョンもしくはテルミナ・リージョンからリユニオン・リージョンに移住されました市民の皆様は、市民ランクに応じてリソース税が優遇されます』

キースはデルフィ・リージョンの資源惑星デューターで働いているため、対象外だ。

『お問い合わせは……』

俺には関係のないことだ。キースは完全に興味を失い、テレビ・ウィンドウを閉じてORCクライアントを起動する。

「実験番号3042の……えっと55、失礼、開始まで残

り200カウント」

「モニター各員は計測機器の最終チェックを」

「アルマは何をやっているんだ、もうe軸干渉フェーズに入っているんだぞ！」

「失礼上官、あの、“おトイレ”をしておりまして……」

「排泄は後でよろしい！ お前はオペレータだろ！」

e軸航法を専門とする技術試験サイト“デューター・ファイブ”での所内ORCは、実験中は原則オープンだ。なんでも安全のためらしいが、そのおかげで、キースのような末端作業員でも研究員どものくだらない会話を聞くことができる。

何が“おトイレ”だ、上流階級め。

キースの独り言に返事をするかのように、コーンという甲高いアラートが響く。休息は終わり、ということだ。広がる安息ミームの余韻を味わいつつ、もそもそと検査キットと溶接機をアームで掴み直す。

キースは入出港デモンに隔壁を開けさせ、スラストをふかして外装を眺め回す。

デブリか、ひどく裂けたもんだ。パワードボッドの身体をそちらに流し、補修用パネルをかぶせ、溶接機を乱暴に押し当ててトリガーを引く。

「カウントダウン、50、49、48、47、46……」

キースは末端作業員なので、今日行われる実験が何なの

かは正確には知らない。

現代のe軸航法はe軸プラス方向への移動が主で、マイナス方向はまだ探査が進んでいない。偉そうなセントラル直属の監督官によると、そのマイナス方向を探査するのだ、それ以上知る必要はないだろ、とのことである。

「29、28、27、26、25……」

「オペレータは干渉電圧を規程値まで調整せよ」

「XYZ軸乖離フェーズに入る」

さすがに30カウント前になるとバカげた会話は聴けなくなり、代わりにわけのわからない専門用語で溢れる。こうなるとキースにとってはただの雑音でしかなく、聴き入るのをやめて溶接に集中する。

「重力指向針をeマイナス300に合わせ」

「15、14、13、12、11……」

「重力子投入」

キースのパワードボッドのカメラは、サイトから二恒星マイルほど離れた実験用宇宙港ポート・セブンのあたりがひどく歪んで見えるのを捉えた。なんでも、重力子をぶつけて空間に穴を開けるのでこうなるのだそうだ。

その中心にあるであろう小型の探査船には、圧縮された探査員の意識が直接搭載されている。酔狂な奴らだ。

「5、4、3、2、1……」

二〇一六年四月一日、僕はそのビルの前に立っていた。ついにこの日がきたのだ。待ちに待っていた一日。

僕の名前は平凡^{へいふん}人間、二十二歳。今日から株式会社ツイハイでプログラマとして働く予定の新入社員だ。

散々メディアで技術者不足と言われているこの時代に、わざわざプログラマを目指すひとは中々いないと思う。

同級生の誰に聞いてもみんな口を揃えてこう言う。「ホワイトな会社で働きたい」と。

「技術者がたりてないってことはIT業界はブラック」と。彼らの言いたいことはわからんでもない。だが僕は言いたい。

「なぜ大学に通っているのか」「なぜ就活をしているのか」「なぜ働きたいのか」「なぜ生きてるのか」と。

僕はプログラミングの技術があるわけでもない。パソコンオタクとかギークってわけでもない。

ただせっかく選ぶチャンスがあるなら僕はひとの助けに

なるようなことがしたい。

ひとのためになること。それをこなしてこそ、僕は『自分が生きた証』を残せるのだと思っている。

技術者が足りないという話を聞いて真っ先にC言語の参考書を購入し勉強をはじめ、なんとかこの会社から内定をもらった。

そして今、僕はその会社のオフィスに足を踏み入れるのだ。

お馴染みの鳥のロゴがついている壁を通りすぎ、いよいよオフィスの扉の前までたどり着いた。

ふーっ。この扉の向こうには僕の未来が待っているんだ。

焦るな自分、イメージトレーニングは入念に行った。身嗜みもだ。こういうのは第一印象がものを言う。

ポケットの中には財布に携帯、携帯はちゃんとサイレントモードにしている。

ジャケットにシワはない、クリーニングに出したばかりだ。

髪型もバッチリセットした。完璧だ。

行くぞ…。

コンコンコン。ノックは三回が基本だ。

「失礼します」

大きすぎず小さすぎずの絶妙な音量で僕は言った。

「ふにゅ」

突然人間の声かどうかすら怪しい今までの人生で聞いたこともないような声が聞こえてきた。なんだ？

「だれなのーっ？ はいってはいってーっ」とその声は続いた。

どうやら日本語のようだ。しかしこれは小さい女の子の声にしか聞こえない。

しばらくすると身長約百二十センチ前後くらいしかないような女の子が視界に入ってきた。

「みゃーみゃーどーもどーもっ。お兄ちゃんが新入社員の平凡くんかなっ？ 待ってたよーっ。あたしがこの会社のCTOのみゆちゃんだよ！」

僕は夢をみているに違いない。そうだ。イメトレとかで色々考えすぎて変な夢をみてしまってるようだ。全く、やりにもよってCTOがこんなちっちゃい女の子だなんて。

「ねーねーおにーちゃん？ はやくはいって??」

みうちちゃんは僕の右手を握りながら言った。

「あー、はいはい、入りますー。失礼します」

夢となればもうどうにでもなれと僕は思いながらとりあえず中にはいってみた。

「にゃーんっ」

「ふぁぽれよ」

「あうあうあうあうーっ」

「マ？ マ？ そマ？」

「そうなのですよ。がんばりますよう。えへっ」

僕は目を疑った。オフィスの内装は比較的普通だったというかイメトレ通りだったが、社員に何故か幼女や女子高生が沢山紛れていた。なぜか猫も沢山飼われていた。

見るからに未成年の彼女らに社員が親しげに話しかけていて、中には明らかに痴漢じみたことをしているひとも居た。

なんで僕はこんな夢をみているのだろう。こんな願望はないぞ？ ひょっとしてこれは現実…いやまあたしかに女の子と猫がたくさんいる職場は最高だが…しかしだ。

「ねー、おにーちゃんIDなんだっけ？」

「え、あいでいー？」

プロローグ

胸にワンポイントの付いた真っ黒なTシャツにシルバーのプレートネックレスが光る。その上から薄いグリーンシャツを羽織り、新品同様のシューズを履いて、靴もさつき買ったばかりのような綺麗なスニーカー。

まるで中学校の入学式に着ていく制服のように、全身ピカピカの新品で着飾っているものの、今ひとつ冴えない格好だ。

どこことなく垢抜けない雰囲気こそ漂わせているが、つんとしたつり目と少し高めの鼻、控えめな唇、それらが細い輪郭に絶妙なバランスで配置されたその顔立ちには、精巧に作られた彫刻のように美しく整っており、ふとした拍子に妙に神秘的な雰囲気を感じさせる。

「美人」というよりは「かわいい」といった容姿であるが、田添の興味を引いたのは、彼女のいまひとつなファッショセンスでも、それすら霞んでしまうような美しさでもない。

「真っ白」と言っても差し支えないような、彼女の「白さ」であった。

「えーと、アンネリーゼ白須さん、ハーフなんですか？」
禿げ上がった頭を二、三度撫で回しながら、田添は尋ねた。

「はい、母がドイツ人で、父が日本人です」 たっぷりの銀の髪と、真っ白く透き通った肌、これで青や赤の瞳ならば、そんな病気があると聞いたことがある。下町で古臭い規律に縛られて生きてきた田添にとって、アルビノという遺伝子疾患の詳細など知るよしもなかったが、アンネリーゼを名乗るこの女の場合は、噂で聞くそれとはまた違うのだろうという事くらい察しがついた。

何故ならば彼女の瞳は、赤でも青でもない、よく磨かれた大理石のように真っ白なのだ。

その瞳は、いわゆる白目の部分よりはずっと透き通っていて、吸い込まれるような深さがあるのだが、その色を表す言葉があるとすれば、白。濁りのない、幻想的で、これ以上考えられないほど美しい白なのである。

若干訛りのある、それでいて流暢な日本語で「こういう病気なんです」とアンネリーゼは言っていた。

しかし田添には、そのような人種であると言われたほうがまだ納得できただろう。

この女性は、至って健康のようにしか思えないのだ。それこそ中年太りでビール腹の田添なんかよりずっと。

実はカラーコンタクトか何かを付けているだけで、病気というのは嘘なんじゃないだろうか、嘘を付いているとしたら何故だろう。

身分証明証にかかっている生年月日をみて暗算すると彼女の年齢は……ざっと二十代の前半、しかし目の前にいるこの女性はよくて十八歳くらいにしか見えない。

つまるところ、田添はアンネリーゼを名乗る女を信用する事ができないのだ。

「えっとね、白須さん、お探しの条件に近いところだと、こういう所とか、こういうアパートがあるんですが……ただこのところ、この辺は外国人のトラブルが多くて大家さんの方も……」

「わたし、国籍は日本です」アンネリーゼはちょっとムツとした表情で答えた。

あちゃあ、口を滑らせてしまったか、と田添はアンネリーゼの顔を覗き込むと、この不思議な女性は、ぷいと視線を逸らしてしまった。

いずれにしても、あまり顧客のプライバシーに踏み込んだ話をするのもおかしい話か、受け答えに問題があるわけでは無いし、あとは書類等に不備がなければ良いのだ。

そう割り切ってしまうえば、もう楽なものである。アンネリーゼの住居探しは滞りなく進んでいった。

1 接触

都心部だというのにセミの鳴き声が頭に響く。世間では自然破壊や環境汚染が問題となっているようだが、東京でこれだけ大自然の音を頭に叩きつけられると、全てデタラメなんじゃないかという気がしてくる。

ももんとした熱気がメガネを曇らせる、だらだらと額をつたう汗が気になって仕方がない。

どうせわからないくらいの薄化粧なのに、マスカラが流れて限のようになってしまっただけは大変である。

肩まで伸ばした茶髪を開いた窓から吹き込む真夏の風がなびかせる。

つり目なのに気が弱そうに見えるのは、下がり眉が流行りだとファッション雑誌で見たからだろう。

奥村知佳が私立すずかけヶ丘高等学校に入学してから、三ヶ月半の月日が流れた。

それなりに友達も出来たし、五月病のようなものもなく乗り越え、これからようやく女子高生としての生活が始まった、という具合だ。

ふと顔を上げると一人の少女が、さながらホラー映画の

君と初めて会った日に、僕は小さなアクセサリー専門店に別れを告げた。それはすこし大きな駅のそばにある、小さな系列の百貨店の六階にはいっていた。賑やかなそのフロアの中で、僕のいたその店だけはすこしだけ人の入りが悪かった。位置が悪かったのだと思う。そのフロアに繋がるどのエレベーターから見えにくく、他の店と少しだけ離れてポツンとあるものだから、そもそも知られていないということも店が静かな原因だった。あと一ヶ月もすれば、閉店することが決まっていた。この店の場所に次に入るお店は確か、今若い世代を中心に人気の高級雑貨店だった。店員同士の話を耳に挟んだだけだったから、詳しくは知らないが。

そういうわけで、僕はその店の、すこし太ったお世辞にも有能とは言えない店長にとって、早く処理してしまいたい物品の一つでしかなくなっていたのだ。本来の値段の半分であることを示すものが、僕の近くの商品に次々と貼ら

れていく度に、ああはなりたくない、早く心優しい誰かに選ばれて、もう滅びる運命にあるであらうこの小さなガラスケースから抜けだしたいと強く願うようになっていた。それでも、店の中でどれだけ三十%オフの掲示が増えていっても、店長の顔が日に日に陰しくなっている、僕を買う客は現れなかったのだ。

君と初めてあった日、僕は恋を知った。僕が恋した彼女は月末の金曜日の夜に突然やってきた。他の多くの客の流れの中を優雅に通り返けて、僕のいる店にたどり着いた。自身の商売能力のなさが引き起したものの責任を様々なものに押し付けては、ただ陰気な顔をするこじかでない店長と、べちゃくちゃと確かさのない情報を言葉にすることによって他人の関係を消費することに夢中になっている店員達と、一刻も早く外の世界へ抜け出せる日が来ることを切に願う商品と、僕しかないこの店に、彼女は現れた。彼女を見た時、今まで見たことのあるものの中で、なによりも美しいと思った。だから、彼女が店員に僕を買うと伝えた時は、僕は世界で誰よりも幸せものだった。彼女が僕をプレゼントとして購入したことがわかった時、僕の短い初恋は無残に散ってしまった。

店員がすこし気だるそうに僕の包装方法を聞くと、彼女は僕をギフト用に包んでくれと言った。パスデーカードは店に用意してなかったから、彼女は同じフロアにある文

房具店に移動することになった。僕はもう小さな箱にしまわれて、綺麗なりボンを付けられて、可愛らしくパッケージされてしまったあとだったから、彼女がどういう風にバスデーカードを選んだのか、知ることはできなかった。僕が彼女を選んだバスデーカードを見ることができたのは、君とあった時だったのだ。

彼女はまだケースが閉じられる前に僕を見て、綺麗に笑った。美しい笑顔だった。彼女にプレゼントを送ってもらえる「君」を、あんなふうに微笑んでもらえる「君」を、まだ見ることもない「君」を、僕はとても羨ましく思った。金曜日の夜七時半のことだった。

君に出会う前から、あの美しい彼女にプレゼントをもらえる幸運を持った君に、嫉妬していたのかもしれない。

君のことを初めて見た場所は、どうやら君の部屋だった。小さなテーブルの上で、空になった食事の皿がたくさん並べられていた。すこしだけ高級そうなワインボトルは半分以上空になっていて、君も彼女も、すこしだけ頬が赤かった。君と彼女は向い合って座っていて、それが当たり前のようにだった。彼女が僕をそっとかばんから取り出したことに気付いた時、君の楽しそうな声と、彼女の優しい声が聞こえた。君と彼女だけが、そこにいた。彼女が僕の入った小さな紫の箱を開けた時、君はまだ彼女の書いたバース

デーカードを読んでいる途中だった。小さなカードを手にくっくりと口を動かして、でも声には出さずにそれを読む君は、それはそれは嬉しそうに笑っていた。君は、嬉しい時嬉しそうに笑う。長い時間をかけてバースデーカードを読み終わり、嬉しそうに大きく笑った君は、箱の中から顔をのぞかせた僕を見て、花が咲いたかのように、さっきよりもさらに大きく、大きく笑った。

君は僕を箱ごと君に近づけると、僕の全てを知りたいかのように眺めた。君の瞳に僕が写っていた。ほのかにオレンジに傾いた照明の光が僕と反射して、君の瞳に写っていた。君は僕をよく眺めると、そのたびにすこしずつ君の笑みは広がっていった。君は僕をこの窮屈な箱の中から取り出すことはしばらくしなかった。君は僕を眺めて楽しそうにするばかりだった。君はたっぷり時間をかけて僕を見て、それでも僕を箱から取り出すことはなかった。僕の入ったケースをテーブルに置き直すと、君は「うれしい」と、それだけ彼女に言った。あれだけ長い時間沈黙を保っていたにしては短すぎる言葉だった。君は言葉を伝えるのに着飾ったりしない。だから君の想いはいつだって彼女に届く。君が「うれしい」と言葉をこぼすと、彼女はとても柔らかく笑った。彼女の周りにだけ花畑が作られたかのように、それはそれは綺麗な微笑みだった。彼女は君を大切に思っていた。本当に大切に思っているかわかって、すこしだけ

書いて字のごとく、不死者は死なない。彼ら彼女らはいたずらに積み上げ続けた膨大な過去に縛られ、ただただ可能性だけを叫び続ける。

鎌倉駅から踏切を渡って五分も歩けば、神社仏閣の建ち並ぶ観光地の趣は鳴りを潜めて、辺りは古い洋館と教会に囲まれる。この地区に入れば横須賀線走る電車の音もどこか遠く、小町商店街の賑わいはもちろん、修学旅行生の黄色い声もパツタリと聞こえなくなる。耳に入るのは、しとしとと降り続ける雨が瓦に跳ねる音だけだ。閑静な住宅街、と言ってしまうば途端に安っぽくなるが、そうとしか表現できないほど静かで、住宅に溢れた、街だった。これも静かだと、薄暗い梅雨の憂鬱をより一層色濃くする。大昔からある洋館のカラフルな三角屋根達はどこか色褪せて見え、屋根と屋根の隙間から顔を覗かせる小山は鉛色の

空の下にあって重苦しい。生垣で精いっぱい自己主張する紫陽花達がせめてもの慰めだった。仮にこの寂しい景色の中重たい荷物を一人で運んでいたら、きっと今にも精神がおかしくなって死んでしまっていたことだろう。もっとも、ワタシは絶対に死なないのだけだ。

振り返って荷物を運びつつヨチヨチとワタシを健気に追いかける六脚の自律機械を見やると、自然と笑みがこぼれた。肩から伸びる補腕も、風向きに対応しつつ器用に傘をさしてくれている。

「セイギさん。傘くらは自分でさしませんか？」

あたかも六脚の自律機械が声を発したように、耳元の機器が距離と方向による効果を再現しつつ語り掛ける。メガネ越しに見つめると、前髪を切りそろえたいかにも真面目そうな、つまり委員長長キヤラ然とした少女の映像が自律機械に重ねて表示される。今のワタシをたしなめるのに最適化された、理想的な仮想人格^{アニメキャラ}。でもこのあざとさは、ちょっと落第点だ。

「っはあ？ 嫌だよ。傘をさすの面倒だし、あなたたちの方がうまく雨から守ってくれるでしょ」

「それもそうですが、あなたにはなるべく自活をしていただかないと。私はあなたの日常を助けるための機能総体ではないんですよ？」

「じゃあなんなのさ」

「全人的自立支援機能総体です。あなたを真つ当な社会性を獲得する行動回路まで誘導するのが私の職務ですよ」

「ご存知ですか？ 定命の方々は他者と連れ立って歩く際、補腕を使用せずに自らの手で荷物を運ぶことで『今のこの移動は運搬それだけが目的ではなくあなたとの会話にも重い価値がある』という意思表示を行うのです。共感を発生させられなくても振る舞いには意味が宿るものですから、あなたにも模倣は可能です」

「うるさいなあ。今人間とは歩いてないでしょ」

ワタシの反論に委員長の仮想人格がひるむ。そのわざとらしい振る舞いにワタシが苛立ちを覚えると、すぐ傍の水たまりが不自然に波打ち、雨の勢いも増した。

「というか、白々しいからいちいち場面ごとにキャラデザ変えるのやめて。ドロシー、ワタシはあなたと話がしたいの」

「はあ、なるほど、あなたがそう言うなら、まあ仕方がないですね」

そう言うとき委員長は心底気怠そうに眉をひそめ、露骨に舌打ちをし、次いで一瞬の間をおくと、目に生気は一切宿らないおさげの少女に姿を変えた。ワタシのお気に入りの仮想人格、ドロシーだ。口角の下がったぼんやりとした表情でワタシをじっとりと見つめると、彼女はしんどそうにため息をつく。うん。この声、この息遣い。確実にワタシ

が一番鼻屑にしている声優さんのそれだ。昔は滄刺としていたドロシーも、ワタシの面倒を長らく見続けるうちにどんどんと消極的で鬱屈とした態度をとるようになってしまった。福祉局の人たちが曰く、何度もワタシの支援で失敗を繰り返すうちに自己評価を引き下げ、ついには日に何度も自分を削除するよう上位の計算機に提言するようになったそうだ。まるで不死者のようだけれど、それでもやっぱりこの仮想人格が一番しつくりとくる。ドロシーのかわいらしい容姿と人間の模倣にワタシの機嫌はいくらか向上し、水たまりの波紋も、雨脚の強まりも消える。

「ねえ、この雨、どっち？」

道すがらしと雨を滴らせる分厚い雲を指さしてドロシーに尋ねると、「私に答える義務はない」とはぐらかされた。ということは、犯人はワタシということになるのか。確かに、憂鬱のタネは無限にある。新生活のこと、鎌倉の湿度の鬱陶しさのこと、これからくる夏の厳しさのこと、学校のこと、そして、自分の病のこと。だったら、雨が降るのも、不自然に辺りが静かなのも仕方がないなと思えてきた。

「さあ、着きましたよ」

メガネに表示される案内地に辿り着くと、補腕の片一方がうつむくワタシのアゴをクイと持ち上げて視線を誘導した。

兵士たちは乾いた空の下に行進していた。軍靴の音と、時々の掛け声以外に町の喧騒はない。鳥の鳴き声も車の音もない。雑念もない。そこはある種、どこまでも不穩で、一方でどこまでも綺麗な平和だった。

私は私の憧れの在処を知っている。それは小川のせせらぎのようなもので、小川のどこが憧れなのかではない。今、ここに兵士たちが流れていくように、川はずっとそこを流れていく。うんと美しく胸を打つ。平和とは、まったくそれでいいものだから。

サヴァナトルに若人の軍靴の音がどこまでも鳴り響く。隊列は大通りを進んでいく。ごった返す人々は誰もが無口な幻影で、斜陽に煌く宝石のような、兵士たちの肢体に見入っていた。琥珀色の大きな瞳たちが兵士を照りつけるように見渡し、俄かに涼しい秋風が音もなく通り過ぎた。

貴方は、死ぬ覚悟がありますか。

第一章

置時計が八時の鐘を鳴らす。意識はまどろみ、脂ぎった髪の毛を掻き分ける動作も億劫だった。外から微かな喧騒を風たちが運んでくる。光の漏れるカーテンがやさしくなびく度に、大麻の煙がふわふわと浮かんでは、光と同じように部屋の隅々に散って、消えていった。部屋の埃が煙とともに舞っている。

微かな肌寒かさが冬の到来を知らせていた。ひたすらにただひたすらに、季節は一線の時間の上を走っていく。私の心は置いていかれたまま、町も山河も同じように、知らない大きな運命の渦で移ろう。すれ違っていく。気付けばもう、私の世界はこの部屋だけだった。

一服。煙がちぎれて消えていくように、視界はどこまでもうねり、伸び、引つ張られ、ねじ切られる。目を瞑れば、壁紙がはげていくように、景色たちは真っ赤な血の潮に溶け込む。赤い潮は白い乳に、白い乳は夜の闇の中に注がれる。乳白色の光が度々光っては、消えていく。音はなかった。フラッシュバックのように連想が続く。時々真っ暗な

視界に白い光が雷のように錯綜する。果てしなく遠くから、低い唸り声のような爆発音が大地を揺らしてやってくる。

二服。遠くに煙が渦巻く。地響き。鈍い音。不安な音。ずっと、昔から今まで、脳髓から腰にかけて私を揺らしていた音。じっと大麻を見つめる。

三服。大麻を吸っていれば、とにかく首をくくるほど不安にはならないでいられるから、もう四年も吸い続けている。大麻を吸っている間だけは、全てを許すことができるから……。

ミスヴァール通りのこぢんまりとした映画館に、住み込みの映写技師として勤めて四年を過ぎる。身の回りの世話を映画館の館員がやってくれるので、代わりに給料をもらっていない。

部屋の外から出る気は起こらない。ここで飼いなさらされているほうが、外で生きていくよりずっと心地いい。部屋の外から足音が近づいてくる。館長が、朝御飯を運んで来た。カッソ、カッソ、カッソ、カチャ。

「おはようパラヴォラヴィン」

まだ廊下も薄暗く、館長は暗闇の中からずっと現れ、その手に食膳が握られている。館長は常々、面倒くさがって

いるようなたれ目に斜めに構えた唇をしていて、つまるところ、*“人生諦めた”*といったところの顔立ちの男だった。

「……おはようございます館長」

館長は部屋に入ると、ぶっきらぼうに朝食をテーブルの上に置いた。同じくテーブルの上におかれた茶色の紙袋——大麻——をひと目見ると、ふうっと、ため息を鼻に通して、窓枠に手を置いた。太陽は窓の向こうからありありと館長を照らし出し、光を反射する埃たちと共に陽光に暖められた。琥珀色の瞳が太陽を睨んでいる。

「大麻はほどほどにしてくれ。金が、馬鹿にならん」

「あたしのお金ですよ」

暫しの間がおかれた。館長は口を閉じ、口角をニッと広げた。

「妻でもないお前を介護してる」

「どうせ、フィルムが燃えたら、私なんてそれでお終いですよ」

祭政一致を掲げた明治新政府は、明治元年を以て神仏判然令（通称・神仏分離令）を発布。

千年以上の長きに渡る神仏習合の時代は終わりを告げ、日本各地で共存・融合していた神と仏は新たな神威によって引き剥がされ、両者は厳然と区別される事となった。

…中古以来某権現アルヒハ牛頭天王ノ類ソノ外仏語ヲモツテ神号ニ相称ヘ候神社少ナカラズ候。イズレモソノ神社ノ由緒ヲ委細ニ書付ケ、早々申シ出ズベク候事…

…仏像ヲモツテ神体ト致シ候神社ハ、以来相改メ申スベク候事。附、本地等ト唱ヘ、仏像ヲ社前ニ掛ケ、アルヒハ鰐口・梵鐘・仏具等ノ類差シ置キ候分ハ早々取り除キ申スベキ事…

慶応四年（明治元年）『神仏判然御沙汰』

地方に於いてはこの布告は仏教に対する公然の排斥とさえ見なされ寺院堂塔が破壊されるという事態が起きた。この仏教施設に対する排撃はのちに廃仏毀釈と称される事になる。

それから幾ばくかの時が流れ時代は明治三十九年（一九〇六年）。かつての廃仏毀釈の熱狂も遠く過ぎ去り、日本は太陽の最高神たる天照大神——そしてその末裔たる現人神——を国家の宗廟とし、君臣一体の模範的皇国の基盤を築き上げつつあった。

しかしそれはこの国に根付く八百万の神々のうちの幾らかにとつて、かつての仏達と同様、あるいはそれ以上の受難の時代の到来を告げるものでもあった。

——田んぼのあぜ道で背広に黒い外套姿の若い男と野良着姿の壮年の百姓が話しこんでいる。外套の男はなにやらメモを取りながら、鍬を持った百姓の話を聞いていた。

「ああ。それならなんとなく覚えています。たしかオツネ山にお宮がござんした」

「オツネ山？」

「おっと今はもう□□山と呼ぶんでしたね、ご勘弁。維新前は里の者はみんなそう呼んでおりました。なんでも昔お常という若い娘がそこで死んだからそう呼ばれると聞いた事もありますし、そこにはコンコン様の小さいのが住んでいるから、小狐と書いてオツネ山というとも聞いた事があります」

「狐、ねえ……。つまり稲荷神社があつたのかね？」

「いんや。わしが若い頃はみーんなオツネさんとかコンコン様とか呼んでいました。稲荷じゃあないです」

「狐はウカノミタマの眷属と決まっている。神ではなく使い走りだ。おおかた稲荷という事も知らないまま、ただ狐だと思つて拜んでいたんだろう。まあ珍しい事でもない」

へえと感嘆する百姓を尻目に若い男は懷にメモを突っ込み、かわりにパイプを取り出し、マツチを擦って火をつけた。一息吸つてフーと吐き出し、男は話を続ける。

「それでその稲荷はどこにあるのだね？　今もあればの話だが」

「オツネ山の中腹あたりにございましたよ。お宮をわざわざ取り壊したりはしてないと思います。例の廃仏運動で取り潰されたのは麓の寺だけです。維新前は和尚さんがお水をあげたり読経したりしていたんですが今はどうやらわざわざあすこまで参拝に行く人もおらんでしょうし」

廃仏運動という言葉聞いた途端、男の表情がやや陰しくなる。

「あれは“廃仏”なんて物騒な話ではないよ。少なくとも新政府はそんな命令をしてはおらん。判然令はこの国の神と仏を正しい姿に直しただけだ。げんに仏教も寺も別に日本から無くなつてはおらんだろう。未だに“仏様の祟りで大勢の役人が死んだ”なんて風説を語っている者もいるがね。少なくとも我が内務省でそんな話はトンと聞かないよ」

吸い終えたパイプの灰をトントンと畦道に捨てながら、男は呆れたように肩をすくめた。煙草を懷にしまい、そのまま道草を食わせていた馬にまたがる。

「それではそのオツネ山とやらに行つてみよう。馬で行けるな？」

「へい。小さい山ですし道もなだらかです。しかしお役人さん、一体何をしにわざわざコンコン様の所まで行くんです？」

「神社合祀令だ。その稲荷は□□村の八幡宮と合祀される。神社は立派になるしお前達も近場にあった方が便利だろう。これからはお参りにもいけるぞ」

馬を走らせ外套を翻す男の後ろ姿を見送りながら、百姓は首をかしげていた。

「んー？　お稲荷さんと八幡さまもおんなじモノだったんだべ？」

暗黒定数式

THE DARK CONSTEXPR

暗黒定数式 Vol.2 (見本)

発行日———2015 年 11 月 23 日 初版第 1 刷発行

著 者———	ボレロ村上	南正太郎
	パスベルス	ちょまど
	Viavisr Antivin	高階アリス
	すてにゃん	ちゅーん
	4869	奥村徹
	la saluikhar	ハコ
	如月真弘	

発行者———ボレロ村上
dark-constexpr@boleros.x0.com

発行所———暗黒定数式 THE DARK CONSTEXPR
<http://dark-constexpr.github.io/>

